

こんな姿でまたの再会を

福岡県 福岡県立門司学園中学校 2年

小田 孝太朗（おだ こうたろう）

「マイクロアグレッション」という言葉をどのくらいの人知っているだろうか。実は私も、2週間程前にこの言葉と出会った。場所は、市内の公共プールだった。

この日、ぼくはかつてスイミングスクールの選手コースで、ともにライバルとして競い合っていた友人とともに、この市内の公共プールを訪れていた。友人とは同学年だ。父はアメリカ、母は日本出身で、現在はアメリカに居住している。いつも前向きで、絵を描くことが得意な自慢の友人だ。夏休み、来日した機会に、久しぶりにプールでタイムを競い合う約束をしていたのだ。そのプールで、私は2年ぶりに小学校のときの同級生と再会した。すると開口一番こう言われた

「すげえ。黒人の友人がおったん。」

と。すぐに友人へ振り向くと笑っていたので

「う、うん。」

と思わず答え、その場をすぐに離れた。友人は私を気づかってか、

「気にしなくてもいいよ。しかし、日本はまだまだマイクロアグレッション多いよな。」とつぶやいた。「マイクロアグレッション」どういうことなのか。友人に尋ねることもできず、家に帰って早々に調べてみた。

「マイクロアグレッション」とは、何気ない日常の中で行われる言動に現れる偏見や差別に基づく、見下しや侮辱、否定的な態度のことだそう。意図的でないことも多いが、「小さな攻撃性」とも言われ、海外では長らく問題視されているらしい。

ふと振り返ると、私と友人との出会いも「マイクロアグレッション」だったのではと、ある出来事が頭に浮かんできた。絵の得意な友人と互いに自画像を描いていた際、

「ねえ、肌色貸して。」

と声をかけた。友人は2つの色を手に取り、私に貸すことに戸惑っていた。すると友人の母が、私にこう尋ねた。

「うすだいたい色を借りたいんだよね。でも、この子の肌の色はうすだいたい色かな。」当時小学4年生だった私だが、思わず言葉を失ったことを今でも鮮明に覚えている。

数日後、友人の母が、ある新聞記事を見せてくれた。今から3年程前、プロテニス

プレイヤーの大坂なおみ選手が、黒人男性銃撃事件に抗議して、準決勝を一旦棄権した記事だった。記事を読み進めると、BLM (Black、Lives、Matter) 運動のことが記されていた。人種差別に対する運動のことで、特に黒人への不当な暴力などを排除していく運動のことだ。日本では当時多くの人が、大坂なおみ選手の棄権を疑問視した。しかし友人の家族はこの勇気ある決断を誇りに思ったという。あわせて、日本の人種差別に対する意識の低さを実感し、国によって肌の色の捉え方に温度差があることに心が痛んだようだ。

その後両親も含めて、友人の母から来日して悲しい思いを味わった際の話聞くことができた。日本では、黒人を悪と思う人が未だに多く、同じプールに入ることを断られたり、楽しみにしていたレストランの入店を拒まれたりしたこともあったようだ。肌の色は違って澄んだ心の色は同じ。肌の色に捉われることなく接してほしいと願っていた。心の色は皆同じ。このことが浸透することで交流の輪が広がり、より豊かな国際社会になるのではないだろうか。

ところで、完全に消滅しなくてもこの「マイクロアグレッション」を、せめて減らすことはできないだろうか。私なりにできることを考えてみた。

一つは、社会に浸透していて固定観念のようになっている「だから」をなくすることだ。女だから、男だから、外国人だから、日本人だから。こうした無意識な思い込みが根深いことが偏見にもつながっていると思う。そんな属性に振り回されず、各々を尊重できる家族、学級、学校づくりに努めていきたい。

もう一つは、言葉のもつ力をいつも意識することだ。父から「言霊」という言葉を教わった。言葉には、目に見えない強い力が宿っている。一つの言葉で、自分自身だけでなく、周囲も幸せにすることができる。言葉は良くも悪くも人間の心理に影響を与える。心をつなぐ優しく、安心できるそんな言葉を選び、たくさん発していくようにしたい。

日々社会は進化し、益々高度情報化社会になるにともない、ネットの中での「マイクロアグレッション」も増加してくるだろう。これからも、「マイクロアグレッション」について知り、学び、考えていくとともに、多くの人に発信して理解を深めてもらいたい。

相手のことを常に意識し、共感し、受け入れる、また自分自身も大切にできる、そんな自他ともに尊重できる人に成長して、いつかまた自信をもって友人と再会したい。